

◎蝴蝶の賦

御神の啓示つたへんと、  
あもりましせかそもや又、  
萬花野山をかざるとき、  
柳引くあたりひら／＼と、  
光り長閑けき春の日を、  
終日はなにあこがるし、  
詩人賦美のこゑをあげ、

龜町區 岡 田 刈 萱

暫しな此處に天つ女の、  
ミニエの神や化しました。  
天の彼方に影雲の、  
舞ひ來る蝶の妙なるよ。  
そよ吹く風に送られて、  
さても其身の美しくしき。  
みだくみ筆を折り捨て、

ひとしく天を仰ぐかな、  
 さはれ淨世の習ひとて、  
 蝴蝶の夢の異敢なくも、  
 世は秋風のうら寒く、  
 一本匂ふ菊のはな、  
 あゝ人の子の幸うすく、  
 戀に榮にしひがし、  
 生きては花に身をよせて、  
 詩人汝なとむらひつ、

汝れが氣高きすがたより。  
 双樹の花の色はあせ、  
 覺めては悲し今更に。  
 匿習しろきませかきに、  
 これや手向の花にして。  
 空しき譽求めては、  
 塵にまみれて喘ぎつゝ。  
 死はしろたへの霜の中、  
 さても蝴蝶は榮あるよ。